



元旦、虎ノ門の金刀比羅宮にて

年頭にあたり。

サポーターの皆さま、新年明けましておめでとうございます。
私たち協会は本年、活動10年目を迎えます。
これまでご協力・ご支援いただいた皆さまに心より感謝し、御礼申し上げます。ありがとうございます。

私は本年、これまでの活動を集大成する年度と位置づけ、あらゆる角度から「任意後見」の周知・利用促進に挑もうと心しております。

言うまでもなく、課題は山積しています。しかし、もう一度課題を分断して、それぞれの問題点をえぐりだし、解決につながる手立てを考え実践する所存です。

活動を実践するにあたり、基本となる理念は、「自己決定権の尊重」つまり、老後のことは自分の意思で決定しておくこと、そして、「身上監護の重視」つまり、認知症や要介護など心身の衰えに老若男女が一体となって支え合っていくという社会構造の構築です。

私たちの活動、「任意後見」を軸に考えると、

- 1、委任者への周知はもちろん、受任者(ミドル・ヤング)へのアナウンスをも徹底する。
(狙い：2025年から30年程度、超高齢社会が続くことを考えれば、今のミドル・ヤング世代も他人事ではないことを教授し、日本は、福祉型循環社会に向かうべきであることを知らしめることです。)
- 2、委任者、受任者が共感共有し、安心できる後見システムを構築する。
(狙い：いまだに「不正防止」などと言っている後見職務の幼稚性に楔を打つことです。)

...

以上、先ずはこの2本柱から仕掛かります。

いつもお伝えしていることですが、2025年まで2,500日余りです。
長寿大国、ましてや人生100歳時代とも言われている日本は、超高齢社会のリードオフマンとして、シニアもミドルもヤングも手を取り合って世界の範となる生き方を国境を越えて発信していかなければならないと思います。

若者は高齢者に敬意を表し、高齢者は若者に勇気と希望を与えることができる社会を構築しなければ日本の将来は絶望的と言わざるを得ません。
その意味で考えると「任意後見」は必ずや、2025年型社会構造をつくる救世主となることでしょう。

「人は将来への責任によって賢くなる」(バーナード・ショー)

文責 佐々 和亮

特定非営利活動法人

任意後見利用促進協会®